

高峰秀子著「私の梅原龍三郎」文春文庫 文芸春秋 1997年10月10日刊を読む

私の梅原龍三郎

1. カニ

私が最初に梅原先生のモデルになったのは、昭和25年の夏だった。

日本最初のカラー映画、木下恵介監督演出の「カルメン故郷に帰る」の長期のロケーション撮影で、私は軽井沢千ヶ滝の宿に滞在していたが、梅原先生も夏の浅間山をお描きになるために軽井沢にいらしていた。

お天気が悪いと浅間山は姿を現さず、先生は絵を描くことが出来ない。私もまた、お天気が悪いと撮影は中止である。

ある日、梅原先生から「秀子サン。今日撮影がないなら、ちょっと座ってくれますかね？ おひるは家で用意しておくから」と、電話が入った(座る、というのはモデルの意味である)。宿でゴロゴロしていた私は迎えの車に乗って矢ヶ崎に向った。

当時の梅原先生は有島生馬さんの別荘を借りて住んでいたらしいが、アトリエがないので小さな洋間をアトリエ代りに使っていた。美しい艶子夫人と梅原先生の他には人の姿はなく、緑に包まれた家はひっそりと静かだった。

上等の赤ワインとハム、ソーセージ、フォアグラ、トーストなどの昼食が終ると、梅原先生は小さなスケッチブックと色鉛筆を用意して、モデルの私と向き合った。

先生の、ただでも鋭い眼がカッと見開かれ、鉛筆が素早く動いて、あっという間に最初のデッサンが出来上った。先生は絵と私を見比べて、「似ていないな……似ていない」と^{つぶや}呟いて首をかしげた。しばらくして、先生はへの字に結んでいた唇を開いた。

「眼をね、大きく描きすぎたんだ。だから似ていない。秀子サンの眼は大きいのではなくて、眼の光が普通の人より強いんだ、それで眼が大きく感じられるんだね……秀子サン疲れたでしょう。今日はこれでお^{しま}終いにしよう。また来てくれますか？」

また来てくれますか？ が何回か続いて、ついに完成した絵を見て、私は仰天した。黒くふちどられた^{がんか}眼窩から目玉がはみ出していたからである。真赤な上衣を着て眼の飛び出した私は、いままで私の見たことのない私だった。

「なんだか……カニみたいだな」

「ふふーん、カニねえ、そういや、カニみたいだ……」

以来、梅原先生と私は、この絵を「カニ」と呼ぶようになった。

ロケーション撮影も終り、9月も末になってようやく東京へ戻った私の家に、ある日、「梅原先生のお使いで」という額装店の人が大きな箱を運んで来た。

箱には白い紙が巻かれて、先生の自筆なのだろう、赤の水彩で水引きが描かれ、梅原龍三郎と署名があった。中味は立派に額装された、軽井沢での羊皮に描かれた油彩の「秀子像」で、梅原先生のお手紙がそえられていた。

「この絵を、あなたに進呈したいと思います。ただし、この絵をお受けとりになることに、あなたがいささかでも負担をお感じになるならば、あえて進呈はいたしません。」

簡潔だが、人の心を思いやる優しさの溢れたお手紙で、私は感激した。そして大喜びで頂戴した。

私はそれから5回の引越しをしたけれど、どんな家でも「カニ」のおかげで見栄えがし、私本人よりも「カニ」のほうが主人のようなものであった。

その後、25年経って、私は私の大切な「カニ」を、東京国立近代美術館に寄贈した。「カニ」は現在、近代美術館の梅原龍三郎コーナーに納まっている。

P25 ~ 31

2. 和服

梅原夫人は、生涯を和服姿で通した。彼女は本当に和服の似合う数少ない女性ひとの一人だった。

「日本人なら和服が似合うのがあたりまえでしょ」と思うかもしれないけれど、和服姿が大きな魅力になるほどの着こなし上手はなかなかいないものである。

女優ならば、杉村春子さん。文章家なら幸田文さん。そして、武原はんさん。わが梅原艶子さん。というところが和服番付の最高峰だと私は思っている。

民族衣装というものは、その国以外の人間から見ると、かなりフシギなみものである。とくに、何枚もの着物を重ね、背中にラクダのこぶの如き布のかたまりを背負い、両そでがヒラヒラとそよぎ、馬のひづめの如く二つに分れた白いソックスをはき、その分れめにぞうりの鼻緒をはさんで転びもせずに歩く、なんていうこみ入った日本の衣裳は、外国人の目から見ればずいぶん珍しい、というか、はっきり言えばヘンテコな部類に入るだろうと思う。

私が、梅原夫人の和服姿にいよいよ感服したのは、パリで、ローマで、香港で、と、外国旅行をしたときのことだった。

もちろん、梅原御夫妻は超一流のホテルに泊り、超一流のレストランで食事を取り、超一流の商店で買物をしたけれど、その何処へ行ってもお二人が戸口に足をとめただけで受け入れ側の表情が一瞬緊張して、最高のサービスを受けたものだった。一見して、堂々たる存在感を感じさせる梅原先生に加えて、梅原夫人の品格のある和服姿が、半分は点数をあげた、と私は思っている。

P74 ~ 76

3. グレコの絵

私たちの宿になったスペイン、マドリッドの高級ホテル「リッツ」は、プラド美術館のすじ向いにあった。

梅原先生は美術館の中にあるグレコの「キリスト像」のみに興味を示し、ほとんど日課のように美術館に足を運んだ。

館内に入ると、他の絵には見向きもせず、真っすぐグレコのキリストの絵の前に突き進んで、何分間か凝視しては、クルリと踵^{きびす}を返してサッサとホテルに戻って来る……。

それまで、クレタ島生れで主に宗教画を描いたスペインの画家「グレコ」の名前を、梅原先生の口から一度も聞いたことがなかった私は、先生の、まるで画学生のような行動をちょっとふしぎに思った。毎日のように先生のお供をして「キリスト像」を^{みつ}眺めてみても、私のフシ穴同然の眼には、ただ、等身大よりはるかに大きいグレコのキリストから、特異な光線による重々しい迫力が感じられるだけで、いったい、どこがどうしてこの絵が梅原先生を引きつけているのかがサッパリ分らなかった。

ある日先生は、1577年頃からグレコがアトリエを構えていたという、ローマ以前からの古い都市「トレド」まで車を飛ばした。

トレドは、なだらかな起伏のある静かな街だった。古いアーチをくぐって、ロバに乗った黒衣の神父サンが現れた瞬間は、全くスペインの古画を見るようだった。

グレコが住んでいたという、半分朽ちた粗末な家の二階のヴェランダに立った梅原先生は、何を考えてられるのか、黙々として、強烈な太陽の下の荒漠とした風景を眺めていた。

P115 ~ 118

[コメント]

女優高峰秀子女史と画家・梅原龍三郎氏との交遊録・エッセイ・真実を見つめる心やさしき真の文化人とは何かをうかがい知ることのできる珠玉の作品。いずれもその場に居合わせているような臨場感に富む。

- 2009年8月28日林明夫記 -